樽沢　英治さん　(広島県広島市安佐北区出身)
2018 年度 4 次隊　シニア海外ボランティア
派遣国：アルゼンチン　職種：再生可能・省エネルギー
2020 年 4 月 5 日（日）中国新聞 SELECT 掲載

※中国新聞社の許諾を得ています

障害者思いやる国民性

キャプション：
目の不自由な女性が働く
サン・マルティン市役所の総合案内係

アルゼンチンは日本から 1 万 9 千㌔離れ、時差は 12 時間、太陽は北側を回る。私はブエノスアイレスのサン・マルティン市役所経済産業局に所属している。業務は中小企業の収益改善への助言、生産管理・衛生管理支援やエネルギー効率化支援である。

この国は 9 回目のデフォルト(債務不履行)の危機に直面している。ここ 2 年のスタグフレーションにより物価は 100%上昇した。設備稼働率は 50%、失業率は 10%といった状況である。明るい点としては食料自給率が 230%、エネルギー自給率が 90%と高く、世界 2 位のガス田と 4 位の油田を保有しており、経済の再建は外資の動向にかかっている。

政治経済社会は、時代の差はあるが日本の「いつか来た道」に似ていると感じる。日常生活も気候を含め日本にかなり近い。加工食品、生活用品、耐久消費財の価格は日本以上で、住宅については不動産バブルが進行中である。

日本との違いを感じたのは市民の社会的弱者に対する感覚である。障害者を思いやる感情は、頭ではなく体にしみ込んだ習性のようにみえる。教育や宗教によるものではなく、自然に出てくる感情なのかもしれない。過去に白人優先の西欧化政策を進めた時代があり人種差別がみられることもあるが、障害者に対する差別はないように思う。

法定の障害者雇用率は 4%で、国立中央銀行には聴覚障害のある職員が 300 人いる。私が働く市役所のロビーの総合案内係にも全盲の女性が働いている。4 階建て庁舎の 58 窓口の位置関係とその業務がすべて頭に入っており、誰も特別扱いせず、普通に接している点が印象的である。